

皆様、ご健勝で、佳き新年(2015年)をお迎え下さい。

門崎 允昭 他北海道熊研究会事務局員一同

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

<北海道新聞の夕刊紙面、「私のなかの歴史」、「ヒグマ研究45年」の最終回13回目(9月1日)です。編集委員の「中尾 吉清」さんが取材文章化>

2014年(平成26年)9月1日

私のなかの歴史

最後に皆さんに質問です。山菜採り、あるいは登山で山に行ったら、林道に「クマ出没」の看板。日付は最近です。あなたは、どちらの答えを選びますか。
①楽しみにしていたが、やはり引き返す②笛も持ってきたし、ネタもある。行ってみよう
もう一つ質問です。登山道の近くにクマがいて草をむしゃむしゃ食べ、人を気にするふうもない。回り道はなく、登山者が停滞している。

動物学者

かどさき 門崎

まさあき 允昭さん



①引き返す以外にない②頂上に行きたいし、皆でクマに「ホイ、ホイ」と声をかけながらゆっくり前進して登山を続ける
答えは、引き返すのも、そのまま進むのも、それぞれ正解。皆さんの

ヒグマ研究45年 ⑬

クマ同士のあいさつ。写真上の左が若グマ、右が大人のクマ。2頭が一瞬、鼻先を付ける(写真下)

積極的共存

ナタと笛手に自然楽しむ

自己責任で自然を楽しめばいいのです。ただし、問題のケースではその場所を餌場として利用しているクマの普通の行動で、「人を恐れない新世代クマ」「危険なクマ」などではありません。

道のホームページでは「出没情報のある地域や、出没を知らせる看板がある場所を避けましょう」と勧められています。檜山管内せな

町は「山や畑でヒグマのふんや足跡を見つけたら、すぐに引き返しましょう」と呼びかけています。

要するに、クマは危険で恐ろしいものという前提の事なかれ主義。実に消極的な姿勢で、これではクマと人間が本当に共存していくことにはならない。

私は1991年、サハリンで1カ月、93年にカムチャツカ半島クリル湖畔で10日間、ヒグマの調査をしました。クリル湖畔では96年写真家の星野道夫さんがヒグマに襲われ亡くなっています。アラスカ、カナダ、北米でもホッキョクグマ、アメリカヒグマ、クロクマを調査しました。

カナダ、米国の人々は釣り、キャンプ、トレッキング、カヌーなど野外の趣味を楽しんでいます。ふんや足跡を見たから引き返す、などという人はいませんね。

ただし彼らはおおむね銃やピストルを持ち、「クマが寄ってきて万が一の場合は撃つ」。これでは、私たちの参考にはなりません。

私はクマとの「積極的共存」を唱えています。北海道は古くからクマがすんでいて、クマのいる自然が本来の姿なのです。それを前提に、クマについて理解を深め、自己責任の下、積極的に自然の恵みをクマと分かち合っていく、という考え方です。

アイヌ民族はそうしてきました。現代でも、クマがいる地域の住民は、クマがいて当たり前、という意識で日々の暮らしを営んでいます。

昨年7月、研究者仲間らと共に、道庁を訪れクマに関して道民に啓発すべきこと、積極的な共存の実現を申し入れました。今後、私は発言を続けていきたいと考えています。

北海道の自然は豊かで、魅力的です。山菜採り、登山、キャンプ、積極的に利用しましょう。そのためには、繰り返しになりますが、ナタと笛を必ず携帯してください。

(聞き手・中尾吉清)

||おわり||